
ある王国の幽閉された魔王

東上尊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある王国の幽閉された魔王

【Nコード】

N6369Z

【作者名】

東上尊

【あらすじ】

ある目的のために王に仕えることを決めた魔王
利用するために牢獄から魔王を開放した王女。
魔王の時間はその日、動き出した。
最強魔王とそれに関わる者たちの数奇な運命と
圧倒的な力を発揮する魔王様のドタバタファンタジー
今ここに……？

暗闇の住民

季節は冬か、秋かそれとも夏か、はたまた春か、
ふとそんな事を考えた。

夜風とは無縁、陽射しとは無縁の暗く

闇に溶け込むどこかの部屋のどこかの檻の中

変わらない匂いに変わらない風景、老いることを忘れ

死を忘れた異端者。

遠い昔、今よりずっと昔、彼は人に恐怖を与える悪魔の使者

魔界の王、魔王と呼ばれていた。

しかし、その呼び名も時がすぎるにつれて薄れ、今となっては
神話の域に達している。

アリス・グレイン

それが男の名。かつて名乗っていた魔王という肩書きに隠されて
しまった

彼の真の名前。それを口にする者はこの世にもういないかもしれ
ない。

胸のどこか、心のどこかでいつの頃からかそう思うようになった。

■ ■ ■ ■ ■

「陛下……お、お待ちください」

「遅いぞリス！ 妾よりも足の遅い侍女はお前ぐらいだぞ？」

螺旋に続く階段を二人の少女が下るようにして駆けていた。

一人は淡色のドレスの裾を両手に持ち下り、もう一人は白と黒の

メイド服を一心不乱に振り乱して深刻な面持ちで追う小麦色のおさげの女。

背後を走る侍女に視線を僅かに移すと、シャーリー・ロア・アイシスはせせら笑うかのように

そう言う、侍女は息を乱しながら言葉を返した。

しかしその言葉には余裕は見えない。

「なら、なぜ私を深夜このような時間に呼びつけたのですか……体力で言えば、エイリスやアリアが適任ではありませんか。どうして私のような……」

うつ向き、表情を濁らせる侍女、リスを背にしながら彼女には見えないように僅かに頬を緩ませ、笑ってみせる。

「決まっているだろ？ そちは侍女の中で一番扱いやすいからだ」本音は違っていた。

リス、アルバーンは数百という侍女たちの中で最も信頼でき、王位争いの時も怯まず自分に使えてくれたかけ外のないほんの一握りの心寄せられる友だと思っていた。だが、本音をリスに告げることはない。

一人を贖ふると他の侍女たちの嫉妬を一心に受けることになるからだ。

嫉妬ほど人を貶め傷つける物は無い。

激しい王位闘いを戦い抜いてきた彼女にとってそれは忌むべき物だったのだ。

そこで、呆れた表情を浮かべリスは言葉を落とす。

「扱いやすいなんて……陛下はひどいですう」

彼女の声聞いて、アイシスは微笑し、黙ったまま階段をかけ降りた。

■■■■

「チェックメイト」

暗闇に沈む空間で声が漏れた。

人を寄せ付けない絶対の闇。

見えるはずのない暗闇の彼方でそう声を漏らした。

ひどく傷んだチェス盤にキングやナイト、それぞれが置かれ
相手なき戦いを彼は行なっていた。

数百年も前にはチェスの強い相手がいたものの

その者も刹那の時間の流れに飲まれ息絶えてしまった。

それほど長く彼は小さな部屋の檻の中で暮らしていた。

ただ、一人の男の言葉を鵜呑みにして待っていたのだ。

時が来ることを、夢がかなうことを、グレインは待っていたのだ。

「どうやら、時は来たらしい」

そう、漏らすと、数百年の間、誰も踏み入ることのなかった

木製の小さなドアが、蹴破られるようにして碎かれ

周囲に破片と埃を舞い上げる。

同時に蹴破られた扉の先から一人の可憐な少女がメイド服を

身につけた小柄な少女を片手に握り盾のようにして

舞い上がる埃を防ぎながら暗闇に目を向けている光景が映る。

「本当にあったわ！ 王宮最下層の更に下にある

黒の牢獄。かつて魔王が投獄されたという伝説の檻。

伝説通りなら、魔王はまだこの中に……」

キョロキョロと周囲に目を走らせる白銀の少女。

暗闇でありながら彼女の顔は鮮明にグレインの視界に写りこんで
いた。

そして僅かに頬が緩み、微笑を浮かべると、自ら進んで彼女の前
に歩み出る。

「やあー君が僕の運命の人か」

そう彼女の前で言ってみせると、彼女は驚いたように再び周囲に
目を走らせる。

「うあ！ どこから声が……」

「陛下！に、逃げましょう。なんかいますよこの部屋！」

彼女の腕に握れられた武器と化しているメイド服姿の女がそう震

えながら声を漏らすと

白銀の彼女は蒼白な顔で信じられないと言わんばりにそわそわと周囲に視線を送る。

しかし、彼女の目には目の前に佇む男の姿は写り込まない。

絶対の闇の中、グレイスを見つけ出すのは困難なことだった。

通常の人間ならば気配というモノを人は誰でもまとっている。

しかしグレイスは違う、数百年の間、闇の中で生きていた彼の気配はすでに闇そのものの、闇の中にいる彼女ら二人には決してその姿を捉えることはできないのだ。

暗闇から突如、なんの気配もなくもれる声を聞いて驚かないものはいない

困惑する彼女ら二人の前で、グレイスは彼女らのために空に光を上げた。

光は手の平から生まれ、暗闇の彼方を暖かなオレンジ色の光に包み込む。

一瞬、目を細め、光を拒んでみせる少女はすぐに前に立つ男の存在に

気がついた。一步後に跳ねると、グレイスの顔を見据えて搾り出すようにして

貧弱な弱々しい声を漏らした。

「あ、貴方がアルイス・グレイン。かつて魔王と呼ばれた男ですね？」

白銀の髪、白銀の瞳の彼を見据えて女はそう言った。

それにグレインは笑いながら答える。

「へえー僕の名前をご存知なんですネ。嬉しいなあー」

「やっぱり……」

考えこむようにして腕を組む彼女とは裏腹に彼女の片手から開放された

メイド服の少女は怯えるような眼差しを男に向けて、白銀の髪の少女の後ろで

か細い声音で、口を開いた。

「陛下……魔王ってなんのことですか……私何も……」

しかし、その言葉を見殺しして白銀の女はグレインに続ける。

「ならば、王族である妾の名に従ってくれるか？」

「嫌だ」

そうグレインが彼女に言ってみせると、彼女の表情がわずかに曇った。

「妾は知っているのだぞ？ 初代国王とそなたとの約束を」

「へえーそれはどんな約束だい？」

彼女はおもむろに古めかしい一枚の紙を男の前に提示すると、これが証拠、と言っている。

グレイスはその紙に目を通すと僅かに笑い、頷く。紙にはこう書かれていた。

『一つ、王族の娘には手を出さないこと。一つポルベピッチを王宮に入れないこと

一つ、魔王だからって威張らないこと。一つ、不細工になれ。一つこのちくしょうが。

一つまあーそんな感じでよろしく。一つ、お前を導くのはお前の前に立つ

我が孫の孫の孫の孫の孫の孫のまあーとにかく孫の娘だ。娘の言葉に従っていればいずれと予言は遂行されるだろう。

だから、その娘に従え。ああー後、絶対に王族に手をだすなよ？

おとこは別にいいけど、女はダメ！ これは絶対。守らなかったら殺す……』

それをひと通り目を通してグレインはその紙を焼き払った。

「死んでもなお嫉妬深い男だな……あいつは、まあー

言いたいことは分かった。遠い昔の約束だしな。

それに自分が望んだことだ」

「それって……」

「ああ、お嬢さんの命令に従うよ。あのバカ王子との約束だからな

これからよろしく」

軽いお辞儀を彼女に向けて行くと、相手はニヤリと笑い胸を張っていう。

「ならば、これからの計画をそちに話しておこう。

妾はまずはじめに……」

その日、彼女は行き淡々とこれから巻き起こす計画について語り始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6369z/>

ある王国の幽閉された魔王

2011年12月21日13時50分発行